ふみの会ニュース

■発　行　ふみの会広報部
■発行日　2006 年 12 月 9 日
■連絡先　藤川博樹
〒 115-0045
東京都北区赤羽 1-48-3-203
tel03-5249-5797 fax03-3901-6090
■編 集　中井、塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直
http://www.mdn.ne.jp/~fumi/top.html

No.299

12 月行事日程

■ニュース編集
原稿はテキストにして下記へ
ワード・一太郎文書も可
kamo@sun.email.ne.jp
エッセイ：5 枚（2000 字）
小説：10 枚（4000 字）目安
■締め切り
12 月 17 日（日）
■ニュース購読料
1200 円（年）
切手 80 円× 15 枚
郵便振替：東京 00170-1-18290

「吉田さんの再起を祝う会」まだ宴会が始まる前である（11/19 大宮）

◆大宮で吉田さんの「再起を祝う会」に行ってきました。吉田さんのおかげで、数年会っていない友達とも会えました。家族総出で参加してくれた雅人さん一家。子どもがいると、場が賑やかになっていいもんですね。しかも、躾がいいから大きな声は出さないし、大人の話に飽きたら、すかさず自分で好きなメモ帳をだして書いていたりと、ほんとに感心しましたよ。（つ）

◆昨日は、みなさん。お疲れ様でした。楽しかった。往年の酒豪が回復したかに見えた吉田さんの姿を見、それに雅人さん夫妻と元気な三人姉妹にも会えた。なんか天にも昇る気持ちになってしまった。駅でみなさんに別れてから、私は駅の東口商店街を少し歩いてみたのです。大衆酒場にもぐりこみ、焼き鳥3本と清酒1合を飲みました。何枚か写真も撮りました。（かもめ）

前列左より
雅人家長女・次女・三女、吉田さん、吉田夫人、塚原さん
後列左より
礼子さん、雅人さん、藤川さん、直樹さん　撮影・つぐみ

スカートめくり（前）

蒲原　ユミ子

やられてしまった！　いじめっ子のユウタに。

エリはすごく気をつけていたのに、スカートめくりされたのは、これで3度目。

エリはくやしくて恥ずかしくて、ピンクのフリルのついたスカートをぎゅっと押さえた。頭のポニーテールのリボンまでくやしそうにふるふるしてる。

エリの側にいたチカもやられたが、チカはユウタを追いかけ、頭をゴツンとたたいて仕返ししてた。ユウタは笑いながら逃げていった。エリには、チカのような勇気も運動神経もない。

エリはため息をつきながらランドセルに教科書をつめ、帰りの仕度を続けた。

ユウタは、担任のマリコ先生に厳しくおこられても効き目がないのだ。その時は、すごく神妙に「ごめんなさい。もうやりません！」と誓うのだが。

「お待たせ！」

と言って、親友のトモコがお手洗いからもどって来た。トモコは元気よくランドセルを軽々と背負った。トモコはクラスで一番大きい。性格もさっぱりしていてぐじぐじしない。エリはトモコが大好きだ。

エリはさっきのことが尾をひいて、力なくランドセルをどっこいしょと持ち上げた。

道々、元気のないエリにトモコがたずねた。

「どうかしたの、エリちゃん」

エリがわけを話すと、トモコは、（なあんだ、そんなこと）という顔で、

「ふうん」

とだけ言った。エリは怒り声で聞いた。

「トモちゃんはスカートめくりされたことないの？」

トモコは当然のように言った。

「ないよ」

エリは大げさにおどろいた。

「クラスの女の子は、みんなされているのよ。トモちゃん、ほんとうにないの？」

トモコはこくりとうなずき、目をぱちぱちさせた。

エリはくやしさをトモコにぶつけた。

「ひいきだわ！　ユウタくんたらトモちゃんをひいきしてる！」

「なに、それ」

「だって、女の子みんながスカートめくりされてて、トモちゃんだけされてないって、ぜったいひいきよ！」

これは、エリのへりくつだ。けれど、少しの間、とまどっていたトモコがぎゅっと顔を引きしめた。

「わかった。じゃあ、わたしもスカートめくりされる」

「えっ！」

エリはこまった。エリはただトモコに八つ当たりをしていただけなのに。トモコを責めるのではなく、ユウタに自分が、「いやだ」と言わなくちゃあならないのに・・

でも、エリはトモコにこう言ってしまった。

「ほんと？　そんなことできる？」

トモコは強い眼差しでエリを見た。

「ぜったいやる。ショウニンには校長先生になってもらうから」

エリにはショウニンの意味がわからなかったが、こういうことで校長先生なんて出てきたらこまる。（どうしよう、トモちゃんを止めなくては）と思ったが、どう引き止めたらいいか名案が浮かばない。

ぽかあんと口をあけたままのエリに、おだやかな顔にもどったトモコが笑った。

「じゃあ、あしたはいっしょに遊ぼうね。きょうは家の手伝いがあるから」

と言うなり、トモコは走り去った。

トモコの家は、繁盛している八百屋『八百鮮』なのだ。
エリは、のろのろと足取り重く家に向かった。

次の日の帰り。
ランドセルにめちゃくちゃ教科書を放りこんでいるユウタに、トモコがさりげなく言った。
「ちょっと、たのみがあるの」
トモコの方がユウタより背が高い。ユウタはトモコを見上げ、
「おう、なんだ」
と、気のいい返事をした。まるで仲のいい友だちじゃあないの、とエリが思ったほどだ。
「用があるので、校長先生のところまでいっしょに行ってくれる？」
とたんに、ユウタは態度を変え、帰り支度を急いだ。
「だれがそんなとこに」
すると、トモコがにやにやしながら言った。
「じゃあ、こんどからおまけのリンゴとかミカンはやめちゃおうかな」
トモちゃんは八百屋の手伝いでそんなことをしていたの！　エリには、トモコが大人のおばさんのように見えた。
ユウタは仕方なさそうに言った。
「ちぇっ、じゃあ、ちょっと行くだけだぜ」
「うん」
トモコは急いでランドセルを背負うと、エリに（おいで）と目で合図した。
トントン
トモコが校長室のドアをノックした。

ちょっとしてから、顔をのぞかせたのは、太いたれまゆ毛の校長先生だ。トモコとエリとユウタの３人を見てにっこり笑った。まゆ毛がもっとたれて恵比寿さまのような顔になった。
「何か、用かい」
トモコがきっぱりと言った。
「校長先生、おねがいがあります。聞いてください」
「じゃあ、まあお入りよ」
校長先生はドアを広く開けた。ユウタは帰ろうとしたが、トモコはすかさずユウタの腕をつかんでいっしょに入った。
エリは校長室のはじっこに立った。ちょっとうす暗い感じの蛍光灯。壁にずらりと並んだ今までの校長先生の写真が、エリたちを見下ろしていて居心地が悪い。
校長先生は椅子を３人分引いて出し、「まあ、お座りよ」と言ってくれた。けれど、トモコは立ったまま、きっぱりと言った。
「校長先生、ショウニンになってください」
校長先生は不審な顔をした。
「ショウニン？」
トモコは口をとがらせた。
「わたしだけ、ユウタくんにスカートめくりされたことないんです。そんなの、ひいきだから、今ユウタくんにスカートめくりされるので、校長先生、ショウニンになってください」
校長先生は目を白黒させた。ユウタは、（まずいっ！）という顔になったが、今さらここから逃げだせない。
校長先生はちょっと考えてから、
「よし、わかった」
と言い、ユウタの方を向いた。
「ユウタくん、女の子のスカートめくりをしたというのは、本当かい？」
ユウタは消え入るように小さくうなずいた。校長先生は、朝礼の時より真剣な顔になった。
「では、ここでトモコちゃんにもするかい？」
校長先生に見つめられたユウタは生きた心地がしなかった。目の前の床に強力な電気ドリルで穴を開け、逃げこみたかった。
しいんとした沈黙の時間が流れる。
とつぜん、ユウタは、
「ごめんなさい！」
と叫ぶなり、校長室を飛び出していった。開いたままのドアから冷たい風が流れてきた。（後編へつづく）

混沌市凡日録　２０

地上の地獄

蒲原直樹

日雇い労務者相馬信彦は渾沌市うらなり町の市道の側溝に自転車ごと転落し、仮死状態だったところを発見された。すぐに救急病院に運ばれ大手術を受け、その結果命はとりとめたが大きな後遺症が残った。市道を自転車で走行中、後ろから車にはねられたらしい。相馬に当時の記憶はなく、当て逃げした車は不明で、犯人はついに捕まらなかった。

彼は意識が回復すると、救急病院から渾沌市暗闇町の暗闇療育院という重度障害者施設に転院させられた。そこはありとあらゆる不幸が集まった地上の地獄だった。

相馬自身も四肢の自由が利かず、車椅子にも自分では乗れすに人手を借りるしかなかった。しかしそれでもまだましな方だった。彼の部屋の他の五人の居住者のうち三人は車椅子に乗ることさえ出来なかった。一人は硬直した体で手足を折り曲げられなかった。一人はアテトーゼ（不随意運動）がひどく、車椅子は危険だった。もう一人はクラゲのように筋力がなく、車椅子から滑り落ちてしまうのだった。彼だけは車椅子にベルトで縛り付けることで移動が可能だった。

相馬は転院した最初の日に、まだ障害が軽い方の患者にこう話しかけられた。

「あんた、なんでこんな所に来たんだよ、ここは死んで出るしかない所だよ」

その患者は頭も禿げ上がりシワだらけなので六〇くらいに見えたが、実際は相馬と同じまだ四〇代だということだった。身寄りのない相馬と違って彼には家族がいるという話だったが、家族は彼の引き取りを拒んでいるらしかった。比較的軽症の彼にしてそうなのだから重症の患者たちは推して知るべしだった。

相馬は死んで出る気はなかったので、必死にリハビリに取り組んだ。毎日午前午後、リハビリ室に出かけてトレーナーと一対一で手足の運動、器具を使った歩行訓練、一人での手指の運動を繰り返した。しかし成果ははかばかしくなかった。骨や筋肉の損傷はほとんど回復していて、あとは脳神経の問題なのだが、こちらはそう簡単に回復しなかった。彼は焦った。入所後三ヶ月、相馬は絶望に襲われた。食欲がなくなり、給食をほとんど残した。そのまま餓死しようと思ったが、栄養点滴を打たれて死ぬことは出来なかった。

同じ頃自殺騒ぎが数件続いた。アテトーゼの男がこっそり溜めていた睡眠薬を一度に飲んで昏睡に陥った。しかしただちに胃の洗浄を受けて息を吹き返した。そもそも今の催眠剤ではどれだけ大量に飲んでも自殺は不可能だということだった。

それから別の部屋の男が風呂場で首を吊った。夜の見回りの隙をついた計画的な自殺で、こちらは成功した。入浴補助用のクレーンを吊ったフックに、包帯を二重に巻いて紐にしたものを使っていた。オートバイの事故で下半身麻痺になったこの男性は、上半身だけでこの首吊りを決行したのだった。所内はしばらくこの男性を賞賛する声が充満した。

三件目は女性病棟の患者の飛び降り未遂だった。彼女はロックされている屋上への扉の合鍵を用意し、階段と屋上を匍匐前進、これも密かに用意したニッパで屋上フェンスの金網を切断していたところを発見された。金網が太く、女性の腕力ではなかなか切れなかったのが誤算だった。その後、屋上扉のロックは二重になった。

他にも鉛筆で喉を突いた、安全カミソリで手首を切った、などという話がいくつも続いていた。相馬も「カミソリさえあれば」と思ったが、その頃にはもう刃物類の管理が厳しくなってとうてい入手は不可能だった。

手足が動かないのはまだ我慢出来るのだが、雨の降る前の夜などに傷跡が痛むのは耐えられなかった。全身のあちこちが疼き、激しい頭痛・耳鳴り・目眩に襲われた。貰った鎮痛剤を飲んでも焼け石に水だった。痛みのない日は天国、痛む日は地獄で、梅雨時になると毎日が地獄だった。冷え込む夜は病棟のあちこちからうめき声が聞こえた。地獄が毎日続くと、永遠の安らぎを得たくなるのは当たり前だった。相馬はどうやったら死ねるか来る日も来る日も考えた。いくつか試してみたが、どれもうまくいかなかった。

夏も盛りのある日、クラゲ男が死んだ。彼は洗面器の水の中に顔を突っ込んで窒息死していた。それは事故なのか自殺なのかわからなかったが、みんなは自殺だと信じた。洗面器は相馬も試してみた方法だったが、彼は失敗した。それで死ねたクラゲ男が羨ましかった。

転機はある日曜にやってきた。相馬に珍しく面会人があった。それは身寄りがないはずの相馬の親類だった。父親が亡くなって後再婚した母親の相手の連れ子の、そのまた娘ということで相馬と血の繋がりはなかった。しかし初対面の姪はどこか母親に似ていた。姪も祖母の顔は写真でしか知らないはずなので、なぜ似ているのかは謎だった。考えられるのは義父の好みが一貫していたということぐらいだ。

「新聞記事を見てお見舞いに行こうと思っていたんだ、でもなかなか時間がなくて」

姪は屈託のない笑みを浮かべて言った。女子高をドロップアウトして今はフリーターだといった。

「お父さんは、おじさんは行方不明だって言ったんだよ、でもきっと渾沌市のどこかにいるって。だから生きていればいつかきっと会えると思ってた。おじさんは、あたしのたった一人のおじさんだよ、だから長生きしてね」

そう言われて相馬の目から涙がこぼれた。彼女は、

「また来るね」

と言って帰っていった。相馬は再び熱心にリハビリに取り組むようになった。転院六ヶ月目、ついに右半身が動き出し、自分で車椅子に乗れるようになった。彼は嬉しがって暗闇療育院四階の廊下を何度も往復し、エレベータで一階まで下りて玄関先をぐるぐる回ったりした。トレーナーも「よく頑張りましたね、もう一息ですよ」と言ってくれた。

しかしその夕方、院長がやってきて相馬に「退院です」と告げた。

「なぜです」相馬は驚いて聞いた。

「やっとリハビリの効果が出てきたんです、これからじゃないですか」

「だからです」院長は冷たく言った。

「あなたはもう病人じゃない、厚労省の通達でこれ以上の入院は出来ないんです。通院なら出来ますから以後のリハビリは通院でやってください」

「この体でどうやって通院するんですか、バスにも電車にも乗れないのに。タクシー使ってたらたちまち破産ですよ！」

「そういう法令なんです、うちにもどうにも出来ません。ご近所の病院に紹介状を書きますから、そちらへ通われたら」

「私は一人暮らしで部屋は二階にあるんです、そこへ戻ることすら出来ませんよ、まして通院なんてとうてい無理です」

押し問答がしばらく続いたが埒は明かなかった。かろうじて福祉事務所がアパートの大家にかけあって部屋を一階に移してくれたので、相馬は暗闇療育院を退院した。なにはともあれ彼は生きて死の病棟を出ることが出来たのだった。

相馬信彦はタクシーに乗り込む前にその建物を振り仰いだ。まだ浅い春にやって来て、もう夏が終わろうとしていた。その間に自分を含めてたくさんの死を見た。「死の病棟」には明らかに暗い影が宿っていた。相馬は思わず背筋が寒くなった。

（もうこんな所には二度と戻らないぞ……）

日雇いの仕事はもちろん、いかなる仕事ももう出来ない。生活保護は難しい、障害者年金もおぼつかない。相馬の生活設計は成り立つ見込みがなく、これから出て行く娑婆も地獄に近かった。しかしなんとしてでも生きていかなければならない、薄い縁の少女のために。相馬はそう決意するのだった。

小説　一人ぽっち

内田幸彦

（十）その朝（開戦の日）

彦一が商業学校に入学した年だった。その朝は小雪が舞い、底冷えがした。靴を履き尽くし、配給もないので裸足で運動場に立っていると、冷たくて足が疼く程だった。

朝礼台に立った教頭は、

「校長先生から特別のお話がありますので」

と言って、校長と入れ替わった。沈痛な面持ちの校長は、重い声で、

「本未明、米英軍と真珠湾において戦闘状態に入りました。諸君も一層、君のため国のため、全力を尽くしてくれるよう、切に願うものであります」

彦一は重く暗い緊張感に襲われた。当時は、四年前に始められた日中戦争（日支事変）がまだ解決していない。それどころか、日本軍の旗色が悪く、国民の戦意は低下、厭戦気分が拡がりつつあった。

一年もあれば片付くと、手を着けた日中戦争は四年かかっても埒が開かず、その上、米英の超大国が敵側に加わるとなると、彦一のような学生でもタダならぬ危険を感じない訳にはゆかなかった。

食糧も衣料も決められた配給制だったから、常に空腹だし、連日の空襲と警戒警報には、口には出せないが、国民は不安を感じていた。その矢先である。

彦一は、父亡き後、母一人を置いて軍隊に志願することはしなかったが、友達・級友たちは続々と志願してゆく。彦一ら学生も、敗色をそれとなく感じ取っていた。

英語は敵性語だとして学科から外され、それを喜んだ生徒も多かった。そして、勤労奉仕と称し、農村へ、工場へ、疎開の手伝いへと引っ張り出され、勉強どころではなかった。

口を開けば、「東亜の盟主日本」「神国日本」「君のため、国のため」と国民に喧伝するが、国民は疲れ果て、もう意気は半減していたのである。

人々は廃品回収をやらされ、女・子供は疎開、学生は軍需工場や農村へ増産に駆り出され、英語は廃止。いやが上にも、世情はただならぬものとならざると得なかった。退却を撤退、戦死を玉砕と称して戦況をカムフラージュしても、踊り疲れた国民はもう動かなくなっていた。

兵役検査を受けた青年は、現役と称して即入隊。さらに、陸海軍ともに若い志願兵を取り尽くし、国内に残っている男性は体の不自由な者か、病弱者のみとなった。

食糧も一日の配給量が現在の一食分くらいなので、国民は常に飢え、自然に人心も殺気だち、わずかな事で喧嘩腰になった。そこへ、連日の空襲に備え、夜は灯火管制で電灯を黒い布で覆い、常にまっくら。人々の気持ちも暗くならざるを得ない毎日だった。

戦争の当初こそ、出征兵士は楽隊で送り出されたが、これも防諜のためと禁止され、一人こっそり入隊することになった。戦死者の遺骨も戻らなくなった。軍・政府の宣伝を、国民は逆に受け取り、それも厭戦気分を濃くしていた。

その上、米英という世界の強国を相手にするとあっては、彦一ら若い学生も暗い予感を覚えぬ訳にはゆかなかった。アメリカ映画が上映禁止になり、衣服が切符制になって、時局の緊迫してきたことを誰もがヒシと感じる昨今となったのである。

「欲しがりません勝つまでは」「撃ちてし止まん」「進め一億火の玉だ」などと檄を飛ばしても、国民はオイソレとは踊らなくなっていた。「神国日本」「大東亜の盟主日本」の真価も低下し始めていた。

（十一）学徒動員

一九四三年（昭和18）六月二五日、「戦時学徒動員体制」が実施され、中学・高校・大学を対象に、学生を軍需工場や農村へ派遣し、兵器・食糧の増産が計られた。

彦一も隣の街にあった海軍省指定の軍需工場へ派遣された。腕白坊主たちは勉強はしないでいいし、軍需工場用の特別物資がもらえるし、昼食まで出るので、手を叩いて喜んだ。主食の一日の配給量は二合二勺（３６０ｇ程）では、三度のお粥も啜れない位だった。

派遣された工場は、高射砲・重機

関銃・錨が主な生産品だった。彦一は最初、旋盤工で入社したが、間もなく脚気を患い、先生の配慮で事務所へ廻された。

彦一は勤労課（源氏の労務課に相当する）に入り、千人近い従業員の出勤率を調べる。出勤日数が特配物資の配給量に影響するから、慎重に調査した。物資不足の世知辛い時代なので、間違うと即座に苦情が来る。

ある日、調べていた出勤簿から目を離し、ホッと一息すると、向かいの庶務課の一人が彦一を見ていた。しかも、何かを訴える熱い目だった。生まれて初めての経験にドキドキした彦一は思わず目を伏せた。

まさか？　と思い直し、仕事にかかると、熱い視線を感じる。それも一度や二度ではない。彦一は度胸を出して、次の視線を感じると微笑んでみせた。彼女の顔もほころび、目が笑った。それで二人の意志は通じた。

彦一が小使室へお茶を飲みに行くと、彼女も来た。彼女が小使室へ行くと見ると、彦一も行った。お茶を飲みながらの他愛ない話が楽しかった。

彦一は嬉しくなって、工場へ出勤するのが楽しみになり、風邪をひいても出勤した。彼女と逢いたいばかりだった。

彼女の大きいおでこが可愛かった。小さいけれど整った鼻、丸い目が鼠のように可愛かった。美人というより、コケティッシュな娘だった。

小使室で、食堂で、池の堤で、秘かに逢うが、親兄弟の話とか、世間話とか、二人の核心に触れた話はしなかった。でも、それで充分――逢っているだけで楽しく、心豊かになった。

彦一の初恋は永くは続かなかった。召集令状が届いたのである。入隊の前日まで彦一は口には出せなかった。残酷な気がしたのである。

やっと入隊の前々日、打ち明けてみると、「ひどいッ！　何故、早く言ってくれなかった！」と走り去った。

これが事実上、彼女との永遠の別れとなった。新兵には手紙を書く暇も、電話する間もなく、敗戦を迎えた。

復員するや、彦一は早速、彼女に手紙を書いた。三、四日もあれば返事が来る距離なのに、十日経っても二十日経っても返事は来なかった。彦一は辛抱強く五度も手紙を書いた。

返事が来た。吉か凶か、彦一の胸は高鳴った。開いてみると、

――今更、小さな波も立てたくありません。いい方をお見つけ下さい。お元気で。

と、取りつく島もない冷たい返事だった。彦一は諦めざるを得なかった。

振られたショックと淋しさで、彦一はしばらくはボンヤリ暮らした。時間が経つと、心の痛みも薄れ、やっと立ち直ることができた。

彼女とは縁が切れたかに見えた。しかし、彦一と彼女とは目に見えぬ絆で繋がっていたのである。

学校を卒業し、彦一は繊維会社に就職した。本社から工場長が派遣されて来た。分工場だから、労務も会計も彦一の仕事だった。

ある日、工場長が言った。

「外田君、君はうちの妹を知っているらしいな？」

最初は何の事か判らず、首をひねっていたが、フト、工場長も彼女と同じ姓であることに気付いた。《まさか？　……》

「どうだい、土曜日でも一度、麻雀でもやろうじゃないか、妹もいることだし」

彼女の事はもう忘れていたが、顔を見たくなり、承知した。

その日は午後六時からゲームを開始した。勝負は小さく、勝敗は小幅だった。脇に置いたビールを飲みながらやっていたので、小用を催し、四畳半を通り抜け廊下の突き当たりにあった便所で用を足し、ゲームの席に戻るべく四畳半の襖を開けた。

さっきは真っ暗だったのに、電気スタンドが煌々と輝き、彼女が両肌脱ぎになり、両手で体を支え、微笑をたたえている。暗闇に浮かび出た乳房が白い。

ドギマギした彦一は夢中で麻雀の部屋に飛び込んだ。頭が混乱した彦一は勘が鈍り、最後まで負け続けた。彦一の求愛をアレ程にして振り切った彼女が何故？　乳房を見せた意図は？

数年後、結婚した彦一は、妻の見ていた卒業写真を何気なく見た。妻の後にいるのは、まぎれもなく彼女だった。髪こそオカッパだが、間違いなかった……。彼女は、彦一の学徒動員にまつわる忘れ得ない思い出になった。

（つづく）

ピアノ（3）

中井　豊

瀧本君は「バイエル修了程度」だったようだが、「ハノン」や「ツェルニー三十番」も練習していたように思う。その腕前で、モーツアルトのピアノ・ソナタ、ベートーヴェンの「悲愴」「テンペスト」「月光」などを懸命に弾こうとしていた。もちろん、ほんの一部しか手に負えなかった。

彼は口数少なく、私が傍らに坐っていても家のピアノを弾き続けるだけの時間が殆どだった。しかし、彼のピアノの音には、佐藤先生にはない《繊細な優しさ》とでも言うべき何かがあり、その演奏を聴くことは楽しかった。才能さえ感じ、私は秘かにそれを信じた。しかも、ピアノの演奏を側で聴く機会は他になかった。彼は和声の勉強もし始めており、作曲しながら即興で演奏してくれもした。

ある日、押入からヴァイオリンを出してきて、

「これ要らないか？」

と言われた。ちょっと面食らったが、『篠崎バイオリン教本（第一巻）』と一緒にくれると言う。私はもらうことにした。ケースがなかったので、風呂敷に包んで持ち帰った。

時期は高校三年の秋だったから、受験の準備も頭にあったが、嫌いな事より、ヴァイオリンで瀧本君のピアノと合奏するという好きな事が先だった。ついに、二人でハイドンの「驚愕シンフォニー・第二楽章（アンダンテ）」を合わせた時の愉快は今も憶えている。

当然のことに、私は大学受験に失敗した。そして、父の転勤に伴って和歌山県川辺町に引っ越し、浪人生活が始まった。勉強は午前中と、夜にやることにし、午後は散歩とヴァイオリンの練習に没頭した。夜勤明けの父の部屋の隣で下手なヴァイオリンを弾きまくったのだから、さぞかし苦痛だったに違いない。一言の文句も口にしなかった亡父には、いずれあの世で謝るしかない。

一度、白浜の天山閣ホテルでドア・ボーイをしていた瀧本君が泊まりがけでやって来たことがある。我家にはピアノがなかったし、二人とも未来が見えないような時期でもあったから、あまり話ははずまなかった。

小学生が隣家で「ドナウ川の漣」というピアノ曲を練習していたので、それに合わせて旋律をヴァイオリンで弾いてみたことがある。しかし、これは今で言う「ストーカー」のようで、あまり面白くなかった。

翌年も模擬試験の結果に反して、受験は不合格だった。それで、二年目の浪人生活は下宿して天王寺の夕陽ヶ丘予備校へ通うことにし、ヴァイオリンを持参しないで、合格を目指すことにした。すべり止めに、私立大学も受験した。

大学へ入ると、学校は学園紛争のさ中だった。それでも、大学にはオーケストラがあって、構わず活動していた。覗いてみると、同い年で数学科二回生の近藤泰寛君がいて、ヴィオラを弾いていた。彼の家へ度々泊まりに行ったが、ヴァイオリンとヴィオラの二重奏をやってみることなど思いも寄らなかった。まだ、そんな名曲があることすら知らなかったのである。

夏休み、東久留米市の公務員住

宅の佐藤先生のお宅へ伺い、先生のピアノに合わせて「ト調のメヌエット」などをヴァイオリンで弾いたことがある。曲の始めだけを無理矢理ひいただけなのに、先生は楽しそうに伴奏して下さった。

ヴァイオリンでも私の音色が瀧本君のと違うという話を先生にした。すると、先生の一番の親友は作曲家の松村禎三さんで、

「オレがショパンを弾くと、松村が《ショパンはそんな風に弾くんやない》と言って弾いたが、音が違うので感心した」

と愉快そうに話された。

この折り、先生と一緒に瀧本君と会った。当時、瀧本君は御徒町にあるキャバレー「ボーナス」でピアノを弾いて生活していた。瀧本君は先生と私を楽屋へ入れ、舞台裏から彼自身のバンド演奏を聞かせてくれた。先生は、「音大生でも即興演奏は中々あれだけ出来ない。作曲志望なら、松村に紹介しようか」

とまで言われた。しかし、瀧本君は、

「無理だ」

と言うのみだった。

紛争が一段落して大学の講義が始まると、下宿の近所にいた音大生にピアノを習うことにした。彼女には「コールユーブンゲン（視唱）」「ソルフェージュ（聴音）」をも同時に習った。それは、佐藤先生から必須科目として聞かされていたからだろう。

学校にピアノはあったものの、個室にはなっていなかったので、毎日ピアノの練習をすることはできなかった。そのうち、月謝も負担になり、止めてしまった。結局、習ったのは三ヶ月くらいだったろうか。そういえば、大学のオーケストラでヴァイオリンの先生を紹介してもらい、辻久子の弟子という女性の先生のお宅へ通ったこともあった。これも三ヶ月くらいで続かなくなった。基本の概念を理解できるようになったのは実に最近のことである。

紀伊中之島駅に隣接して、四階建ての国鉄宿舎（アパート）が数棟あり、大学二年の時、私の一家はそこへ越した。それで、私は下宿を引き払って、電車で通学するようになった。

隣の棟に音大生がいて、ショパンの「木枯らしのエチュード」を盛んに練習しているのが聞こえてきた。それまで耳にしたことのない腕前だった。一、二度、伴奏を頼み、ベートーヴェンの「ロマンス・ト長調」をヴァイオリンで弾いた。最初は珍しそうだった彼女は、あまり楽しくなかった筈で、自ずと沙汰止みになった。

（つづく）

青い波頭と白い龍

第七回

藤川博樹

■二度目の大会

もともと全学連が結成されたのは九月だったので、その後毎年秋に大会が行われていた。九月だったのは創立の事情で偶然だったので、これからは春にしようということになり、三月にふたたび大会が行われた。

その人が登場したとき、会館はひっくり返りそうなほど沸き返った。その前に、何か予兆のようなものはあった。リヒアルト・シュトラウスの「ツァラトゥストラはかく語りき」の出だしのようなもやもやとした、低音のオルガンの地響きが長く太く続いていた。舞台裏の控室で何かあったに違いなく、学連の学生たちが慌ただしく動き回っている、その動揺が客席にも伝わってきた。その瞬間、音楽は劇的に転換して、舞台の照明が一段明るくなり、オーッという歓声がとどろきわたった。共産党の宮本顕治が登場したからである。宮本顕治はやや後に傾いた、年齢を感じさせるきわめてゆっくりとした、柔道家を思わせるがに股で演壇に向かって近づいて行った。

共産党が学生運動に大きな影響力をもっていた最後の時代であった。七〇年の安保改定反対闘争や小選挙区制反対の大規模なデモンストレーションも終わり、大きな政治的な行動は起こらなくなっていた。政治の季節は終わろうとしていたが、誰もそれに気付いてはいなかった。共産党は政権に参画していこうと考えていた。学生の大会に共産党の委員長が登場して演説するのは初めてであった。それだけ、共産党の学生運動への期待が大きかったのである。

宮本顕治の演説は長く、理詰めで、政治的アジテーションといえるものではなく、聞くのに根気を必要とした。彼の性格なのか、あるいはあえて煽情的な言い方を避けているのか、理屈っぽく長いフレーズの言い回しが聞きづらく、特に女性や老人には受け入れがたかった。煽情的な言葉やリズムで大衆の心をとらえ、引き回すことができなくては、テレビのお笑い芸人は失格であろう。しかし、大衆は飽きっぽく、タレントが見捨てられるのにはわずかな時間しか要しない。政治家は芸人ではない。

学生たちは熱心に宮本顕治の話を聞き、その情勢分析や政治的な判断は尊重されていた。演説が区切りを迎えるたびに、「オーッ」という感嘆の声と拍手の雷鳴がとどろいて、間を置かなければ続きを始めることができないほどであった。社会党や共産党の左翼政党が国会で大きな議席を占め、疑獄事件で元首相が逮捕され、政権の腐敗があばかれ、その崩壊は目前であるように思われた。

宮本顕治は、出てきたときと同じように、ゆっくりとした足どりで退場した。大会の議長が再度の拍手をうながすまでもなく、退場してから学生たちの自発的で熱狂的な拍手がしばらく続き、常三たちの興奮はなかなか覚めなかった。アイドル・タレントや人気スポーツ選手に熱狂する現代の聴衆が、同じほどの熱狂的な拍手を政治家に送ることはもうあり得ないが、それは日本の文化が爛熟の期を迎え、その文明が下降線をたどり始

めているということなのであろう。

全学連大会に合わせて都学連大会が開かれ、ふたたび常三は執行委員に選ばれた。都学連大会にも共産党の選挙候補者が来て演説した。一年の間に二度の大会、二度の国政選挙が開かれた。政治的革新の準備はととのった、さて後は実行あるのみというわけである。政権を取るつもりなので、学生運動に政党があからさまに介入してきた。批判にかまっている時間も余裕もないのだった。共産党は本気なのだ。

四月の、都学連が主催した第一回の新入生歓迎ゼミナールには、ダカーポも来たが、東京の参議院議員予定候補のＳが来て講堂で演説した。

七月の参議院選挙では、ついに宮本顕治が立候補した。

六沢副委員長は、「宮顕が落ちたら俺は党をやめるぞ」と言った。牟田書記長やその部屋にいた書記局員たちは、声をのんで顔を見合わせた。一つの議席の当落が、自分たちの政治的信念には関係ないのはみんな頭ではわかっていた。しかし共産党の政治的な正しさの神話といったものに自分たちが依存していることを常三たちは肌で感じていた。

「個人への盲従はよくないよ」と村木。「それは宮盲（みやもう）というう」

「俺は不盲だ」と会計の瓜川。「フモウってなんや」と氏家。

「不破哲三盲従のことだ」と上野が解説する。毛沢東盲従つまりマオイズムが批判され、文化大革命の悲惨な実態が暴露されつつあった。

「瓜川君ほどの理論家が盲従かい」と河原副委員長が笑った。瓜川はマルクス、レーニンはもちろんグラムシなど、そのころ翻訳され始めていた文献を大量に読んでいる読書家として有名だった。夜十時の寮の刻限に間に合わず、門近くの街灯の下で立ち尽くしたまま、朝までグラムシの獄中ノートを読んでいたというエピソードが活動家の中で有名だった。学連の内部で経理の仕事ばかりやっているのが不満で、「外に出たい」現場に出たいと言い続けていた。その要求が聞き入れられて、大会後、現場担当になっていくつかの学園を担当した。

まもなく常三が新宿の工学院大学の校舎に文化部の打合せで出かけたとき、エレベーターから出てくる瓜川とすれ違った。学連の事務所にいたときとは打って変わって、別人のようないきいきとした表情。すれ違った瞬間の姿勢のまま、後ろ歩きに数歩戻って「おう、何か連絡はないか」と声をかけてきた。そして、「じゃ、また後で」と薄くよれよれのレインコートのポケットに手を突っ込んだやや猫背の姿勢で、にこにこ笑いながら去って行った。

その十日程のちの会議で常三は、うつむきがちで元気がない瓜川を見た。笑っていた表情がウソのように沈んでいる。事務所に座って電話番をしながらグラムシを読んでいたときに思い描いていたようには、現実は甘くなかった。自分は優れた革命家でもなく、現実は革命的に変化しなかったのを知ったのである。

街中の似顔絵師（六）

瀧本　文彦

イタリアン・レストランから少し下り左に折れると路地があり、路地の両側に台湾料理店や居酒屋、寿司屋、焼鳥屋、割烹料理店やジャズ喫茶がある。そこは、僕には思い出深い小道である。

「タンポポ」でピアノを弾いていた頃、この路地で、世界中の音楽界に衝撃をもたらした「ノヴェンバー・ステップス」の作曲家、武満徹と出くわした。

僕は宇田川町から道玄坂に向かってこの路地を歩いていた。演奏時間が近づいていたので脇に楽譜を抱えて急ぎ足に歩いていると、二人の男とすれ違った。「セロニアス・モンク」と言う声が耳に入った。僕は、おや、と思い二人の男の方に目を向けた。

「セロニアス・モンク」はジャズピアニストである。僕が初めて買ったジャズのレコードは「セロニアス・モンク」だった。バンドマンになった頃、バンドマスター（テナーサックス奏者）の並木さんに、

「どういうジャズピアニストのレコードを聞けばいいですか?」

と尋ねると、

「セロニアス・モンクがいいんじゃない」と言われ、御徒町の店でレコードを買ったのだった。

買ったレコードを初めて聞いたとき、《下手なピアノだな》と思った。リズムがずれていた。鍵盤を殴るように弾いていた。時々何の脈絡もない音を出した。突然ミスタッチと思われる雑音が聞こえた。モンクの弾くピアノは与太っていた。何というへんてこりんなピアニストを勧めたのだと腹が立った。クラシック音楽ばかり聞いてきた耳には耐えられなかった。

上野のキャバレー「ボーナス」の並木バンドマスターが率いるコンボバンドで、何とかジャズの響きを出したい、ジャズのリズム感を出したい、とおんぼろのアップライトピアノに向かい夢中で弾いていた。休憩時間になると近くのジャズ喫茶「イトウ」に行き黒人の演奏する一流のジャズを聞きコーヒーを飲んで気合いをいれるのであった。気に入ったピアニストは「バド・パウエル」と「ウインストン・ケリー」だった。

しばらくたってからである。「セロニアス・モンク」の良さがわかったのは。間の取り方。訥々と語るフレーズ。語りかけたいことが多かろうに、必要最小限の音で語る。吃っているようにも聞こえる。時々鳴る不協和音は、枯れかけた木の枝が見るものの目に突き刺さるように聞くものの耳に突き刺さる。どのようなタイプのミュージシャンと共演しても自己のスタイルを変えない。

マイルス・デイヴィスと共演した時、マイルスのソロが始まると、伴奏を止めてピアノから離れお尻を振って踊りだす。マイルスはお前のバッキングは邪魔だと睨み付けたのである。意固地である。唯我独尊である。武満徹はエッセイにセロニアス・モンクの魅力を書いている。

小道ですれ違った二人の男の一方が武満徹と分かった。長髪で小柄であらゆる音や言葉や映像に興味を持ち続けている作曲家。尺八と琵琶とオーケストラによる協奏曲として書き始めた「ノヴェンバー・ステップス」。日本の伝統楽器とヨーロッパの伝統楽器である管弦楽器オーケストラとは如何に苦心しても融合しない。殆ど諦めていたが、ふと思いつく。融合しないのなら融合しないまま異質なものどうしをぶつければいいではないか。そして世界を驚嘆させた。世界の武満徹になった。

僕はすれ違ったとき「セロニアス・モンク」と言う言葉と風貌で直ぐ武満徹と思い感激した。僕は名残惜しい気持ちで後ろを振り向いた。五メートルほど先で武満徹がこちらを振り向いた。あの時の光景は僕の心に深く刻まれている。上野公園で出会ったあの似顔絵師と共に。

（つづく）